The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	障害のある仲間達から「まちづくり」へのアプローチ：NPO法人ウィズアス　神戸ユニバーサルツーリズムセンター
Author(s)	石塚, 裕子
Citation	未来共生学. 2017, 4, p. 286-297
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60735
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

障害のある仲間達から「まちづくり」へのアプローチ

NPO 法人ウィズアス　神戸ユニバーサルツーリズムセンター

石塚 裕子
大阪大学未来戦略機構第五部門特任助教

写真 1. 神戸ユニバーサルツーリズムセンターの入口

名称：NPO 法人ウィズアス
場所：神戸市中央区
設立年：2006 年
活動内容：高齢者、障害がある人だれもが旅行を楽しめるよう、宿泊、移動、観光にかかわるサービスの手配、相談事業に取り組んでいる。また、まちのユニバーサル情報誌の発行、車いすの貸し出し事業なども行っている。

1. ユニバーサルツーリズムセンターとは

汽笛が響く空に、青い海を望む、神戸の街のランドマークである赤いポートタワーの袂に神戸ユニバーサルツーリズムセンター（以下、神戸UTという）はある。神戸UTには、2期生のNさんが公共サービス・ラーニングでお世話になった。朝の10時頃にお邪魔すると、「おはよーございま～す！」と大きな声であいさつしながら、次々と仲間たちがやってくる。「くらもとさんはー？」と神戸UTの代表である鞍本をさがすＩさんに、鞍本が「おはよーさん。今日も元気に来たね」と笑顔で応える。神戸ＵＴには鞍本をはじめさまざまな障害のある仲間たちの笑顔があふれている。

Nさんは初回の活動日に「目の前にいる人の障害を忘れてはいけないという気持ちと、相手を『障害のある人』と見ることへの抵抗という葛藤がつねにあった」と感想を述べた。しかし、活動終了後の報告書では「現場を肌で感じることで報告者自身、皆様の抱えている問題への意識や関心が、心情的に醸成されてゆきました。報告者にとっては、今回の活動そのものがユニバーサルに通ずるものであったと思います」と書き記した。神戸UTの場は、Nさんをいっしょに取り組む仲間として迎えいれてくれて、Nさんが「障害」を自分たちのこととして考える力をつけてくれたことがわかる。

そのような場である神戸UTは、NPO法人ウィズアスが運営する就労継続支援事業B型の作業所である。ユニバーサルツーリズムセンターとは、高齢であっても、障害があってもいっしょに旅が楽しめるようサポートするワンストップセンターのことをいい、移動、宿泊の手配、相談から、介助者の派遣、旅のコンシェルジェ（観光ガイド）まで様々なサービスを提供している。

神戸UTの事業には、神戸市内の駅やホテル11箇所に車いすの無料貸し出しステーションを運営する「KOBEどこでも車いす」や、ユニバーサル情報を利用者視点で紹介する「神戸ユニバーサルライフ情報誌びと（bito）」などがある。情報誌「びと」は16ページフルカラーで1万部、年4回発行している。これらの事業を神戸ＵＴに勤める障害のある仲間達が担っている。もちろん旅のコンシェルジェ（観光ガイド）も同様である。コンシェルジェ担当の下肢に障害のある車いすユーザーの仲間は、バスや鉄道を使って車いすでも難なく移動し、神戸の魅力的な観光地やお店に来訪者を案内する。彼らは、入口の段差やトイレの場所の情報をはじめ、日頃から利用して気心しれた店員さんがいるお店など、来訪者がユニバーサルに神戸を楽しむために必要な情報をたくさんもっているのである。

このような神戸UTの活動は、観光、まちづくりの分野で先駆的な取り組みとして注目され、2008年3月に国土交通省から発行された「観光のユニバーサルデザイン化 手引き集～だれもが旅行を楽しめる環境づくりのために～」のモデルとなった。

我が国のまちづくり、主に社会基盤整備において障害者や高齢者への配慮、いわゆるバリアフリーの取り組みがはじまったのは1970年代前半からであるが、神戸UTの取り組みは、まちづくりに新たな転機、福祉とまちづくりの接点を生みだしつつある。

本稿では、福祉とまちづくりの共創の萌芽として、神戸UTの活動がはじまった経緯から福祉とまちづくりの接点について考えてみる。

2. 共生の取り組み――合言葉は「まちへでかけよう」、「共に楽しもう」

2.1 活動の原点

NPO法人ウィズアスのまちづくり活動は、当該法人の代表である鞍本が、障害のある2人の娘の生活を暗中模索する中からはじまった。上の娘が養護学校を卒業するのを機会（1992年）に立ち上げた、デイサービス「えんぴつの家 ライフディケア」（以下、ライフという）の20周年目に記した手記の中で、活動の原点となる2つのエピソードを詳述している[1]。とても素敵なエピソードなので、長くなるが、以下に要約して引用する。

《心の中にある原点1》

障害のある子どもの親として10数年の間は、東や西に名医が居ると聞けば出かけ、何度も同じような検査を繰り返し、何か良い治療方法はないかとたずねた。〈中略〉 少しでも歩けるように、少しでも話すことが出来るようになればと、“娘のためだ”と、自らの心に言い聞かせるように朝から晩まで訓練の日々が続いた。〈中略〉

そんな時だった、親父が家にやってきては、娘を車いすに乗せ散歩に出かけ、いつも予定の時間をオーバーして帰ってきた。〈中略〉 いつものように怒り心頭の私の目にもくれず、車いすの中を覗き込むようにしながら「今日も楽しかったね！またおじいちゃんとお散歩にいこうね！」とほほ笑んだ。その時、あまり見せることない（娘の）嬉しそうな笑顔がそこにあった。外に出かけるごとに小麦色に日焼けしたかわいい笑顔があった。そして、何が大切なのかを見失っていた私がいた。

〈中略〉歩けない、話せない娘を、そのまま受け入れることが大切だと、教師でも医師でもなく、今は亡き親父から教えられた。次の日から訓練という言葉は、私たちの家庭から消えた。

《心の中にある原点2》

長女が10歳、次女が6歳になった頃だったと思う。妻の両親を連れて20数年前に1週間の滞在でハワイに出かけた。〈中略〉 私はシュノーケルを付けて海を楽しむことはなかった。毎日のように車いすとバギーを押し食事に街に出かけた。夜遅く部屋に帰ってくると娘たちの入浴、食事の介助をした。場所は違うが神戸での日常とあまり変わらない日々が続いた。〈中略〉

食事が終わる頃、どこからか演奏が始まり、皆が音楽に合わせて楽しく踊り始めた。〈中略〉白髪の初老の一人の男性が近づいてきた。「Shall We Dance」と、言いながらバギーに座る娘に手を差し伸べた。〈中略〉 2曲ぐらい踊った後、ニコニコした娘が帰ってきた。老人は、娘を優しく抱き上げてバギーに乗せた後、私たち全員を見渡しながら優しい眼差しでゆっくりと語りかけた。「Enjoy Your Life」と、〈中略〉 眉にしわを寄せ疲れきった様子に見えたであろう私に近づき、長い人差し指を突き出し、「And You!」と言いながら、先ほどとは違った眼差しで、じっと私の瞳を覗き込んだ。その瞬間、周りの風景と音楽と時が止まったような気がした。〈中略〉

「Enjoy Your Life! And You!」“毎日しんどいね。でもそんな顔をしていたら周りの誰も楽しむことが出来ないよ！さぁ！いっしょに旅・人生を楽しむためにはどうしたらいいのか考えてごらん”と説かれた気がした。〈中略〉

「And You」の言葉が、今も私の心に響き続けている。

鞍本のNPO法人ウィズアスの活動はここから始まった。この2つのエピソードから、鞍本の活動の理念ともいうべき「まちへでかけよう」、「共に楽しもう」がキーワードとして浮かび上がる。この言葉を合言葉に活動の経緯を振り返ってみる。

2.2 暮らしを支える人のつながりを地域につくる

鞍本の上の娘が養護学校を卒業した1990年初めの頃は、重度の障害者は就労できる場がなく、行く先が全くなかった。障害者のためのデイサービスに娘が通うようになって、そこで鞍本が見たのは、障害はあるが健康である障害者

が、親の健康状態などの都合により在宅できなくなり、一人また一人とデイサービスから姿を消し、入所施設に入らざるを得ない現実であった。施設のスタッフに尋ねると「仕方がない」という言葉が返ってくるだけで、施設に掲げてあった「地域と共に生きる」というポスターが虚しく映ったと振り返る。

障害のある仲間が、地域で暮らしていくために、地域の人とつながる場をつくろうと、デイサービスの立ち上げに取りかかった。毎日通うことを条件としたデイサービス「ライフディケア」(以下、ライフという)を神戸市長田区に開設し、ショートステイも始めた。その理由を鞍本は手記に次のように記している。

> 障害のある仲間たちが、生まれ育った街の中でごく普通に暮らしていくためには、家族以外のサポートを創り出す必要があった。仲間たちを支える人たちは1人よりは2人、2人よりは5人。10数名になれば家族の環境の変化に左右されることなく生きていける。

大学に出向いたり、街の中でビラをまいたり、ボランティアを募った。時には6名の利用者に対して10名以上のボランティアが集まり、ライフが満杯になるよう事態もあったそうだ。夕食の材料を買いに「まちへでかけ」、休日にはバーベキューや観光に「まちへでかけ」、障害のある仲間と支援するボランティアが「共に楽しむ」時間をたくさんつくった。ショートステイでは、小さな電球明りの中、ボランティアが夜遅くまで障害者と語り合う姿があったという。そのような中、1995年1月17日に阪神・淡路大震災が起こった。

阪神・淡路大震災では、鞍本の自宅もライフも、被害の大きかった神戸市長田区に立地していたため被災した。なんとか命は助かったが、障害者が避難生活を送るには場所も支援も物資も不足し、生きていける環境ではなかった。鞍本は娘が通う神戸市立垂水養護学校の教室に「垂水障害者支援センター」を立ち上げ、重度の障害者と全国から駆けつけたボランティアとともに144日にわたる集団避難生活を送った。その記録は『障害者たちの144日――阪神・淡路大震災と集団避難生活』に障害のある仲間による手記をはじめ詳細に記録されている。鞍本氏は、語りきれない苦労を経て、障害のある仲間たちの成長ぶりについて次のように語った。

> 「震災時の共同生活が今の活動の原点となっている。毎日、配給される弁当だけではつまらなくなる。すると、買い物をするためにまちへ出かけ、安くて美味しい食材の情報が知りたくなる。そして、日々入れ替わるボランティアに障害のある仲間が、避難所での生活のいろはについて教示し、自分達で毎日の生活を組み立てるようになった。月1回のショートステイではなく、毎日の生活になったことが彼らに大きな変化をもたらし、彼らは強くなった」

2.3 障害のある仲間が社会をつなげる

震災後、神戸UTの活動の原型とも言える「トゥモロー編集室(地域情報誌)」が開設した。鞍本は「トゥモロー編集室」の立ち上げについて次のように語る。

> 「電球を交換してくれる電気屋さんであったり、野菜を配達してくれる八百屋さんであったり、車いすでも入れるお店などの情報を発信できないかと、数人の障害がある仲間たちと話したことがあった。障害がある仲間たちが、サービスを受ける側から、サービスを提供する側への活動がはじまった」

「トゥモロー」には、「まちへでかけ」、「共に楽しむ」ための情報が満載である。「長田の人・街・じゅつつなぎ」のコーナーでは、ライフとトゥモロー編集室のあった神戸市長田区水笠通周辺の店舗の情報が人と共に掲載されている。また、淡路花博ジャパンフローラ2000への訪問記(Vol.9 2000年11月16日発行)、車イス湯ったり紀行(有馬温泉訪問記)(Vol.19 2003年3月20日発行)など、障害のある仲間たちの実体験によるバリアフリー情報と楽しい感想が、障害のある仲間たちの言葉で生き生きと発信された。

トゥモローの創刊号(1998年5月発行)には、社会福祉法人えんぴつの家の松村敏明氏の次のようなコメントが掲載されている。

「『トゥモロー』の活動範囲は長田に集中していても、その活動そのものを全国ネットで、“地域で人をつないでいくこんな活動があるんです”ということを知らせていくことによって『トゥモロー』が長田に限定しながらも、その持つ意味は全国化するはずです」と。

写真2. 貝原俊民美しい兵庫づくり賞授賞式にて

それが今、実現しようとしている。

トゥモロー編集室の仲間たちが中心となり、市民プロジェクトとして神戸ユニバーサル観光ガイド第1号を発行し、この活動が2005年に神戸ソーシャル・ベンチャー・アワード優秀賞を受賞した。その後、神戸UTは国の産業創出事業や地域活性化事業として注目を浴び、2006年から2010年の5年の間、経済産業省、国土交通省、内閣府など各省庁のモデル事業に採択された。この事業を通じて、同様の取り組みを行っていた沖縄や北海道、松江、熊本等の各地域の団体との連携が実現し、障害のある仲間たちが、相互にモニターツアーを実施し、夜景やジャズコンサートなど多様なツアーを企画した。そして、2011年5月には、全国各地のツアーセンターの連携組織であるNPO法人日本ユニバーサルツーリズム推進ネットワークを設立し、2016年3月現在、11団体が連携している。

「まちへでかけよう」、「共に楽しもう」を合言葉とした鞍本の活動は、暮らしを支える地域から、全国へと広がり、障害のある仲間たちがまちに出かける、そして全国から障害のある仲間たちを迎えることで、地域に新たなつながりを生み、人がやさしくなり、共に楽しく活動する仲間を増やしている。そして、街も変えようとしている。障害のある仲間たちからのまちづくりへのアプローチなのである。

3. 共生の諸課題――福祉とまちづくりの接点

まちづくり側からのアプローチはどうなっているのか。まちづくりにおいて障害者や高齢者への配慮、いわゆる福祉のまちづくりへの取り組みが我が国で始まったのは1970年代前半からである。当時、青い芝の会の横塚晃一（2007）が、まちづくりの転換への危惧を表した以下の言葉にもとづき、福祉とまちづくりの接点を考えていく。

> 最近「福祉の街づくり」「障害者に住みよい街づくり」等といわれ、車歩道の段差を一部削ったり、歩道橋のスロープ化などが行政によって行われているが、これらは車椅子に市民権を与える、言い換えれば、生産帯に組み込むことのできるポリオ、下肢切断、脊髄損傷などの人達を労働の場に引き出すことで終わってしまうのではあるまいか。今までのまちは生産の為のまちであり、横断歩道橋一つとってみても生産性を上げるために他のものを犠牲にしてきたといえる。基本的にはこれまでのまちが生産の為に犠牲にしてきた人間性を取りもどすために、まちそのものを作り変えていく、つまり健全者の側が今まで行ってきたことを十分に反省し、障害者もまじえてまちそのものを作り変えていくという発想でない限り真の福祉のまちづくりとはいえないであろう（横塚 2007: 116-117）。（下線は、筆者による。）

3.1 福祉のまちづくりの経緯

福祉のまちづくりの背景には、障害者解放運動の歴史がある。1976年に結成された「全国障害者解放運動連絡会議」（以下、全障連と示す）によれば、障害者による交通アクセス・まちづくり運動がはじまったのは1970年代のはじめであり、青い芝の会によるバス乗車拒否抗議運動をはじめ様々な取り組みが展開された。全障連の結成大会報告書によると、全国統一要求として「街の構造及び交通機関について、重度障害者でも利用できるように、障害者専用という形ではなくて、改善をはかること」が課題として指摘されている。また、1988年から始まったDPI（障害者インターナショナル）日本会議による「誰もが使える交通機関を求める全国大行動」では全国的な統一行動として展開され、2000年に施行された「高齢者、身体障害者等の公共交通機関を利用した移動の円滑化に関する法律（通称：交通バリアフリー法）」の制定に至った。

交通バリアフリー法の施行後は、交通施設を中心とした社会基盤のバリアフリー整備が飛躍的に推進され、2015年3月末現在、全旅客施設[2]においてエレベーター等の整備による段差の解消は84.8%、障害者用トイレの整備81.9%、ノン

ステップバスの導入率は47.0%と一定の整備が進んできた。

これらは「障害者をまじえてまちそのもの作り変えていくという発想」で取り組んできたといえるのか。この点に関しては、行政が福祉のまちづくりを取り入れた最初の事例である東京都町田市では、1971年に市長の意向で建築などの専門家と共に15人の市民による市民懇談会がつくられるなど、建築、土木分野においては「当事者参加」の理念は、比較的初期の頃から確立していたと考えられている（八藤後 2014）。近年では交通バリアフリー法に基づく基本構想の策定過程において市民参加、障害当事者参加が推奨され、建築物のバリアフリー整備の法律と統合した「高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律」（2006年）は、協議会制度を法で位置づけた。このことにより、基本構想策定時には障害者が参画することが原則となり、策定後も継続的に協議の場を設けている自治体が数例ある（石塚ほか 2016）。

これらの制度整備により、不特定多数の障害者を念頭においた社会基盤の障壁の除去は一定程度進んだといえるが、多様な障害者を交えて「個々のニーズ」に応じた「社会的障壁の除去」には至っていない。

3.2 共創への萌芽

鞍本があるエピソードを紹介してくれた。

> 「ウィズアスの事務所が、長田から神戸市中央区のポートタワーの近くに引っ越した（2010年）ことをきっかけに、障害のある仲間たちは、ＪＲや市営地下鉄、バスを利用して通勤するようになった。毎日のように利用する仲間たちは、駅員さんに笑顔で「おはよう…ございます」と改札で声をかける。無愛想なおじさんは返事をすることもなかったが、半年を過ぎたころから変化がおきはじめ、「おはようございます」の挨拶に「おはようさん！」「さよなら」の声に「また！明日！」と返事が返ってくるようになった。仲間たちが社会参加することによって、周りの人達を自然に変えていく、やさしい人、社会に変えていく」

ウィズアスの事務所、つまり神戸ＵＴは神戸・みなと街のランドマークであるポートタワーの袂にある神戸中突堤ビルの一角にあると冒頭で紹介した。ここへアクセスするには、最寄り駅であるＪＲ神戸線元町駅または神戸市営地下鉄海岸線みなと元町駅から国道2号を渡ってくる必要がある。国道2号は、日交通量が約8万台を超す広域幹線道路であり、その道路を横断することは障害のある仲間たちにとっては、大きな障壁となる。

写真3. 国道2号を横断する歩道橋

しかし、現地には国道2号の手前からエレベーターが設置された横断歩道橋があり、その歩道橋と連続した人工地盤により、神戸中突堤ビルから中突堤中央ターミナル「かもめりあ」までほとんど段差のない経路が整備されている。「かもめりあ」内のエレベーターで地上への移動の段差を解消し、船乗り場、商業拠点である「モザイク」へとつながるバリアフリー経路となっている。

この経路は、阪神・淡路大震災で倒壊した中突堤船客ターミナルの復興事業において、計画設計への障害者の直接参加による検討委員会（1996）の成果である。

鞍本とその仲間たちが神戸中突堤ビルに通うことで街の人を変えることと、中突堤ビル周辺の環境をバリアフリー化して、ウィズアスの仲間たちをはじめ神戸を訪問するすべての人に移動しやすい環境を提供することは、横塚がいう「障害者もまじえてまちそのものを作り変えていく」、福祉とまちづくりの共創の萌芽といえるのではないだろうか。

4. 障害のある仲間たちと共に創るまちへ

2016年4月に障害者差別解消法が施行され、さまざまな場面で「合理的配慮」が法的に求められるようになった。「合理的配慮」とは、①個々のニーズ、②非過重負担、③社会的障壁の除去を、個人的な「思いやり」ではなく、社会のルールとして承認されたものである。「合理的配慮」への取り組みは、障害差別だけ

でなく、あらゆる社会問題を解決する際のやり方に影響を与える「共生の技法」となる可能性を秘めているといわれている（川島・星加ほか 2016）。鞍本と障害のある仲間たちが先導してきたユニバーサルツーリズムは、福祉、観光、交通など分野を超えて、対話を通じて合理的配慮をもとめる「共生の技法」のプロトタイプといえる。

障害者と社会の関係を石川・倉本（2000）は、障害者の選択として「同化」と「異化」があり、社会の対応として「統合」と「排除」があるとする。これまで障害者は、教育を受け、リハビリテーションを受け、障害を克服したにもかかわらず「同化＆排除」の場所に留め置かれている状態が続いてきたという。石川・倉本は「同化＆統合（平等派）」でもなく、「異化＆排除（差異派）」でもなく、「異化＆統合」をめざす道を模索する必要があるという。

鞍本と仲間たちの経てきた道は、「まちへでかける」、「共に楽しむ」ことを通じて、まちを変え、人を変え、自分でまちをつくっていく「異化＆統合」の取り組みともいえる。鞍本は、これまでの障害者運動のあり方と比較して、自分たちの取り組みは「対立ではなく“砂に水がしみこむような”運動」と表現した。しかし、その運動を可能とし、持続させるためには環境整備としてまちづくり側の取り組みが並行して必要である。

社会基盤のバリアフリー整備は、不特定多数の障害者を主な対象として行われる事前的改善措置であり合理的配慮ではない。社会構造の不均衡なあり方によって不利益を被ってきた人々への機会の平等を実現することを目的とした措置であるポジティブアクションの一つに位置づけられる。神戸ユニバーサルツーリズムセンターが立地する「まち」では、震災から復興する過程で社会基盤のバリアフリー整備が推進された。そこに偶然にも鞍本と仲間たちが日々、街の人とのふれあい、交流という「対話」を通じて「合理的配慮」を引き出し、人を、まちを変えてきたといえる。ポジティブアクションと合理的配慮が両輪となって、まちを変えていく、まちが変わっていく好事例といえるだろう。

しかしこれまで、福祉のまちづくりは取り組まれてきたが、福祉とまちづくりの連携は少なかった。鞍本は、神戸UTの活動の原点となった阪神・淡路大震災での経験が神戸の街づくりに活かされていないと危惧している。

障害のある仲間たちが取り組む「まちづくり」と、ポジティブアクションとしての社会基盤整備の「まちづくり」との意図的な共創が今後の課題である。

謝辞

本稿を書くにあたってご協力いただいたNPO法人ウィズアスのみなさまに深謝申し上げます。特に鞍本長利氏、野見朋子氏には何度もお時間を頂戴し、貴重なお話を聴かせていただき本当にありがとうございました。

注

1　鞍本が活動の20周年を振り返り執筆し、職員への配布した「ライフディケアの20年とNPO法人ウィズアスの10年のあゆみ」。

2　1日当たり平均的な利用者数が3,000人以上の全ての旅客施設（鉄軌道駅、バスターミナル、旅客船ターミナル及び航空旅客ターミナル）。

参照文献

石川准・倉本智明
2002 『障害学の主張』明石書店。

石塚裕子・高橋富美・新田保次・三星昭宏
2016 「ユニバーサルデザインのまちづくりにおける継続的な市民参加の効果と課題に関する研究』『土木学会論文集D3』72(5)。刊行予定

えんぴつの家・ライフディケア
1995 『障害者たちの144日――阪神・淡路大震災と集団避難生活』垂水障害者支援センター。

川島聡・飯野由里子・西倉実季・星加良司
2016 『合理的配慮――対話を開く、対話が拓く』有斐閣。

全国障害者解放運動連絡会議
2001 『自立と解放への闘争――全障連運動二十五年の軌跡』KSK全障連。

中突堤アメニティターミナル整備検討委員会・（財）交通アメニティー推進機構
1996 『神戸港中突堤アメニティターミナル整備検討報告書』

八藤後猛
2014 「権利としての『インクルーシブなまちづくり』への発展過程と技術」『都市計画310』63(4): 8-13、日本都市計画学会。

横塚晃一
2007 『母よ殺すな』生活書院。